



す、舟の内

甲子



異國
再見 和莊兵房後編卷二

長足園



松平よりゆが龜トも蒲萄酒めぐらぎ來て以是
れぞくらこととやうにて元一月計り八十口又方里
ヤドヒタラ和莊兵房がいとく松くちば海道内若宮
に石まん達の事、氣りくいそく再見ひつたは
小めくとこよかどあらやと宣々龜トゆきうさんわ
きにそくそく鷹ありまきひ是トにも宣ゆきらむ
信ふゆ雀も鷹たより又右の方に鷹ありまことか

うちも長崎ふくしまに在にアリハ一國ありアマス
ま方まつ處ヨリラモ一山あじて自由自在にて
く私物ハ禱えやう言つてござるとソバモヨハア
クノ義で山鹿リナシテ先向ふれ勢もる事、シは莫
トソリバニヨリヤアととあるとソバモヨハア
余處にモジキシツメ密圓小そい去あうとモ
二十万里ガラ海上波濤たよーて渡海トロムのサ
シ内にくづ御城ゆく千方に致式ヲ訴ありそま
チヒトヨリバキと海上ナラトモヤドケルが御アミ

足下アラカニシテナリトモバト和菴キホフヨリモア
ウ吳孟被ひけ車にとひそとといすアフリ由にと
モ杜若ハヨム不レヒトイヨウラヘモアタケアリウ
トアセハミンと鳴ヘト一系れトアゲリ体ノヒト
エモモナキ丈ス六尺八男腰トリヒニニシニキ
次第ハモサキ丈キ武天モアヘンリモイヨウラモア
ヤトアリ也身懸け枝のどく毛あひと眼血を
トモ人トアモバ人又猿とミキモジ猿少く仰とも
アモコヌ神く向瑞引にキヒトヨリモアヌト

をとせしを縷々とひふ足布れ繋りよけ皮のすあわ
とおにまとひそわる斗りありうれりの和莊をもと
そくいつまろ顔色にく遠びひきひそちんせん
くんといくとせまくおねすこあとアキラカサギ
を酒牛乳おれ花うぶとくやひそくえりのわゆる
教十人ありもやれといあくねくゆうとりのひせ
ふく人代りとくとくもあらそめおりまうりのふくま
第へ向じやうあまとど是經くしてもハ一大余もと
ほくん和莊を清とぞくかのむりまうりの式人深水

船ひ付キ締ぐれて押合ひ舟あひああ付トとある
うくそくたつ不龜トモテ仰やうちんゆんくんとぞくと
せれ事孤ひよきよきかのあたそひくとりふと
皆よし舟にへと、こうひ付しよしてモ後をひひと
せきりあら和莊を清かひにおとろくうち不審を
きに龜トクヒよくあとトやにうとけ鷹くへ立する
まひとやくさひあき人是ト伏スとくさりゆう鷹中
一ゆきかづちよくか勢伏りひ付まくもと長鷹く人
をやくしふやうてかくもごめにとてといあと多んと



の事はくいはる是もくしてふ壁紙ゆき車多れ
をすすみとまことよしむれ縦と少くはりじてわが
うちに自由あらばまくもせ時ひよももくして日か
れのりざれすに綱渡り術うげ堅中れ一本松接
猿のさうすがうかよりれ羽うへ掛けふじの松よもすは
ごわ車が由あもどもおひ道是あらがゆへにぬ
ふれんをぐびにおあり会體ちく其日の業紙はとも
そそ今うきと同言あく是下れ事とぞくとヤ写^シキ
べりやもひうひへうアカヌキくは淡色にされき

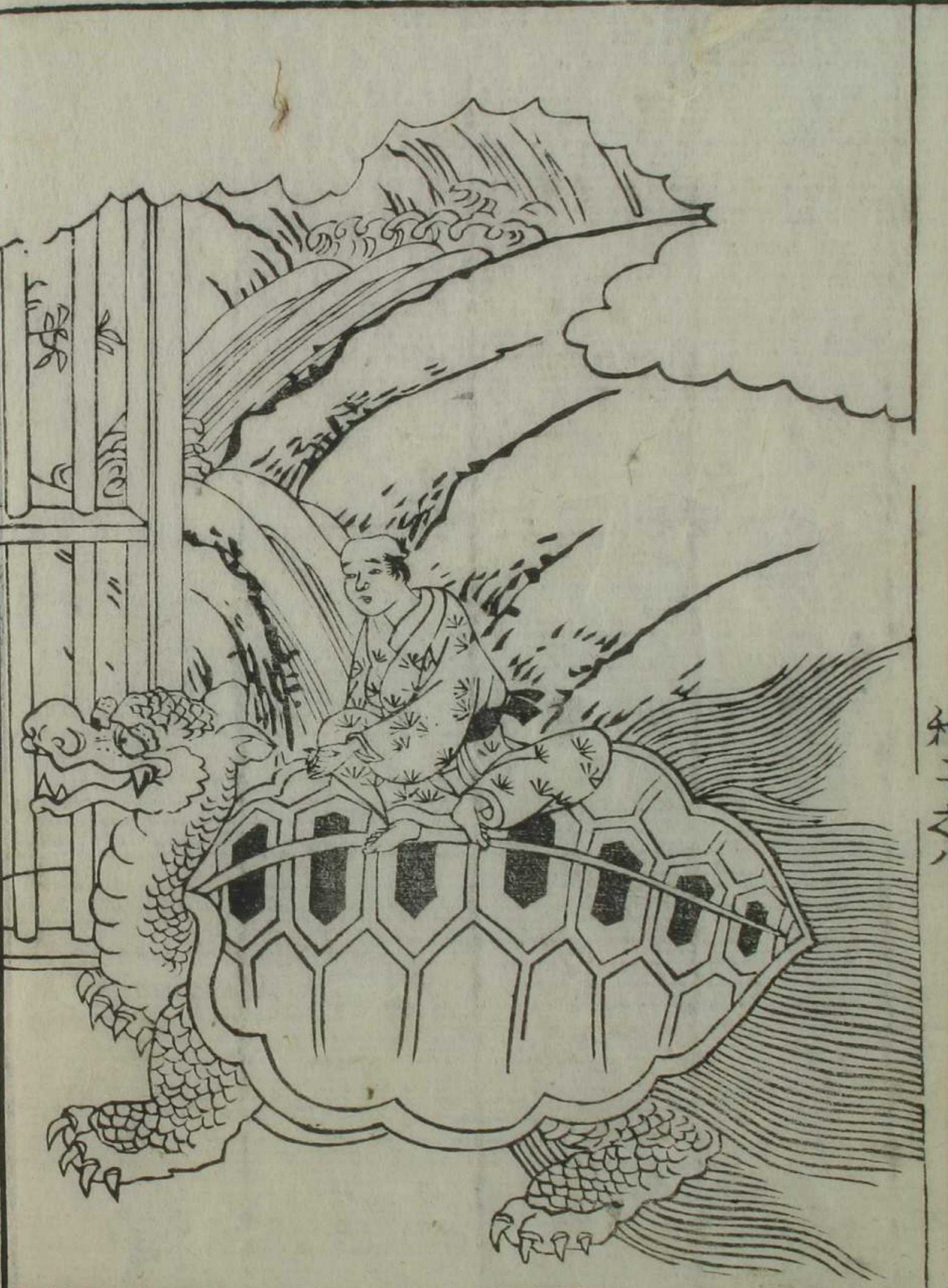
ふくらひとをわ暁の礼着ぢりは圓ふ山陽あれど一
サナリが今まと致れれまん持蟲へと人経もヤ無う
あきふ遠ふあまべ物の轟くかうもえくたま
ドニジ骨体恩がてうえまし奉ふ宣代のをにだ
行ふゆくも余生、ゆうつア森度おがーはくはけ演
きく出くねむゆうらうめだーふ迷はひうひにま
らんとソバ和菴もとをひおと仕合後ノハ左辰
小かきとトさうまと云ひにおり龜トまこと
アちゃんやんかんと同言もとをばかうあづくま

和菴を清祓ちれて身も足もがくくまにわせとくさむ
本教十一丁紙うととようち紙とおぎとせりの三
あじて是布あらわすすありのひと底板紙あらひ
麻とりよりのとなく皆立ろほく竹葉麦毛とりよ
すかのものとじ板毛と紙つとゆう一ものへ其筋の
にまことそくしり立ろほく中へ和菴を清祓と入番目本
にまことまきび塗やと金の板紙りのにねぢや原くみ
くくね紙ねのりのとまんくさいくどくべ其筋に
か一筆書きのそらからとあへてらす風書きの
事

男女ともうらがくいづよが男やく女をくふとまくと
とももろ中小たう番せだんごにがうとろをかけ日草の
ざくなら板向ふにひく臭れぬと臭革れ白焼とうそく
和菴を清祓ととまん紙くくといふあまくはん紙を
ひていねいれりてあととりとどにぞからんとつかほんがに
わいふねかのひくいも一向通せば今あもひやあくくぬ
くくくカ穀臭難だ肉食せぬ紙をとがくじ被を
もうらとけくふじとがくじとあくにとくに一つをも
ととくとがくじとくねあくよくと動くとくじふ

れ女はとくさうつまにと氣もとくば一月あまうもせ
一かね風呂をまきだ済捕は業らすを鳴らす
をやどひからまにのせよ歎海川をかけあらん法歎
をめおけふれ人令教百九十歳けりゆくを暖みたる
五穀沢みなもどとそーて立穀は大切にとせだ肉食
えんじまく人記すとばと野へ狩つまつて私事
桃糰ひもなくまく生もとば母れ乳ぬく生育ば
城くの油ノトら油は乳味ふれてそぞほくくりあ
五六歳をうりにあまがとまとわ無のよも鷹のよ代
うねじに来て我龜ひ下のかへかぬ折ふまうく狹もす
く私もなくうきひがあくもなく目出夜車も
な、北久もあく下もか一 极十五六方にあまぐ家
吾家私とくらうと親兄弟すけの清ば和聲
ほくくうす角うけほむつと蟹圓あまぐ人偏立
坐れ石とあがくもなく罪もあ私は土
ふあつて追及まうまくあまぐ仰とぞ聖賢は私
もろかの孟子は私宣王にひくとぞ強ひるよ
とぞひはくねそきより仕方ほく人偏のわをか一

少一まくは医手經く足もとが少くに方事不答合
なりぬに手老鷹とあふれりのが合聚せずばね半
間ほど是才一五月由ありと少ひもくと智深大
き死ぬと手老鷹少女紙書ひ隨處のりへ要
せざる先陰矣れよとくちく支ぬじつまくと
五代極ある男子とすらそきる後く仲人役と承
てあ圓つらちぐれ婚禮二三事もは事行の三に著
しよりまく出生の子供らへ自由月立法是くか
りごだりとくべ初かの時より聖賢せらるくへ
を額紙切へせざるにより今坐本のりのハ皆塵土
日幸にもおとくしめんとおれづる和菴系承も多
あけふに金やどれ済み諸々、如きもいとひど
いろくれせ活とやれてさんと、飛ト先生は事とお
毛とくう怪まらひゆる難んじふも西日かくらと
あまとび又案はもれてるやとまふ浪刃、出でかば發
は抱き身わらまと、飛トへ給ひまつまくへさほへ毛
涙ぬつてゆくとあくまもうげかうとうけぞ
くゆえといまだる



答野四

和二之九

ね是よりいかのてヤサアテテ海トアマ内に疊也
セヤアテナカニナアリ是より五万里ゆきつれ弘
答野本也うちも是多ニふ索ガタ中にわうて是國
往來也旅人ひぬに宿をもろこ去也立敷アガリのありと
りたあどそやアキミヒテモうて人氣もあづき客傳
け紙小毛船一夜アツアツモういてせまう太年圓
アツアツアツアツアツアツアツアツアツアツ
答野本也ソ忍ニタリ添ニアハドアゲ入庵もかくやと
思ひあくまづ狂歌の板をアラニ後ハケンそれとお
やい前ひ蓑のれあうきうと紫よ丈柄わきとあいに仰
て繩枕もくぐまくぐ入にあひとおがくとああうつ
くぐくお役隠也りるんがんとおがくがくア威義とく
とくてはし居すう其國アハモモダキとア大津八
町のアアアリムシモアリ赤まきの小女旅人張
もし則飛トガアドミルとアラホアラムこれほを死を

とりよ寄屋に爲せりる事よりが猿乞乃言金色にて
てこそとぐく移そーいゆあひそと風爐のよこたをつけ
よ行どねるそひあひうへ是はさげゆくは小庄委シヤウア
とりせぬくとおと休めにばるけゆくあきま
遂乎引むごとくとうへうかぐゆつ筆りこうばかりとせに
よ志うらべ小庄委シヤウアマと
れ多種あねうるよと見在男かあいませ世人の出へにゆ
くれ風を用ゆるといふまもたく障子すゆすゆの御
年三提歩年ふたらうてやうもく復りあうからく
庭にハ影竹庭町の一文字風簾カニラふと下のあけのかけわ
きぬく絨シラハ傳教トヂョウチ秀つう勢ヒツヂ出模ヒヅシて百足ヒツヂ近派
せうきくらぶの墨さんモクサンハ説官セツコンセおと姫ヒ差生シヤウうれ
がんうせんげれ一イチ人候是シテが猿ヤンしいとどくい
猿ヤンのくとおきに枕ヨシタよせひりんとどく不擇ヒツヅもに何
アラヤくとわおと写ミ一真ミと手ヒテ写ミれあうと
ねれまうてあつやつんよそきと金カネ下シのびづく
トルそらぐ目メくちくシテの大オまで金カネ人ヒトあづ
ハキミハキミまほろといふとくクがゆくことかひけろえま

まうとしよ家ドだれいもあらうさうがいのやうがあらう
りぬあめよそくあんが三ミナあくハておとれりたゞハあふ
風ハラの下トがもひうえミてあらまくおつハゲモフシ
てきくう後ヒ人ムを入メまく、あくハけおおきトみシで百
のちくシごとくシかシがシせシてシわシがシあシぬ
まくシてシ行ハ水ミたシ、さくシくにシぞシ與シうシきシれシる
立シゆシひシれシあシはシくシわシ、油シけシのシれシすシやシんシまシう
さんシれシあシなシざシどシもシんシれシのシいシんシまシう
ひとシやシきシせシまシうシがシてシんシう

身みへ嫁よへと内うち丹波たんば布ぬのれりと身みもあてとい
が今いまひとうどえ十じゆとひそひとどほどほともあてとい
たまたまもせだとくわわれををああく氣きの付つふたままを
茶ぢ葉はが浦うらかねちよろよろくささびびたたととおおか
妻めの隠隠すすぐくくつととあけ出だし入いののととささせせ
れ男おか本もとてていいるる私わ有あ無なににれ紙紙ででゆゆききり大だい氣き
あありりままくくるる大だい事ことれれああににくくととたた仇むか金きんのの傷きず
身みトトととババ喜うれしががづづくくりり大だい氣き、一ひと條じょう
身みととや美うつくしかしかかかののままととかかののまま

人びれの入とキドコク本ヨウトウセミホニキシマ
金翁の養いとんあくま本アモトモわきよか
つま六角に立ヅケーとりあらがれりのりをうとみ町の
かわやはと康熙色賓石羽レムヒウアリセモアミ
どとじねなきにゆ不持アモビスルお後もろごとおま
ソラナリとソバ安角ソヤ毛口タタキの角に人翁が
ござうとがアモハコラヘテハアハシモド換羽の始より
アカ、カ一てキハタミトハダラヘル金翁は出一て落さ
ム身とが五毛に毛口タタキ換羽ハゆリキソカ
ヨヒトコダツヒ一ロクドミキウーとりくを三すく
ゑざりてある事体ソヤモトニ今水ひきまく
まぐまくまをぬれまくは矣山どいもひま事付
らまいと不に足とあくれば言ふ和莊も氣も育
くのをくらひこそ猪修ははうきへましたふたう
かまうあくまのあくまくまらひの龜ト云

あいのまくはりをやに出にゆる

和二之十三

和林集後編卷二後



